

令和3年度 第2回学都松本子ども読書活動推進委員会 議事録

日時：令和4年3月14日（月）14：00～15：30

場所：松本市中央図書館 第1視聴覚室

【出席者】

豊嶋委員長、上條副委員長、三ツ井委員、奥原委員、筒井委員、谷口委員、舟田委員、
越高委員、清水委員

事務局：小西中央図書館長、大月館長補佐、百瀬主査、大澤事務員

【次第】

- 1 開会
- 2 館長あいさつ
- 3 委員長あいさつ
- 4 議題

【議事録】

- 1 「4 議題」について

【報告事項1 令和3年度 学都松本子ども読書活動推進事業報告について】

事務局：説明

委員長：ブックスタートが1月から3月にかけてコロナのために中止になったということだが、その方たちへの本の受け渡しは引換券でやっている。受け取りを忘れてしまう方や図書館に足の向かない方もいると思うので、広報に掲載するなど何らかの形でぜひ再度発信してもらいたい。スキルアップ講座最終回の3月12日は、2度の延期を経て年度内に実施することができた。講師を勤めてくださったA委員がいらっしゃるので様子や感想など一言頂戴できますか。

A委員：「松本お話の会」に所属していて語り中心のお話会を長年やっている。興味のある方が集まっていたので大変熱心に聞いてくれた。基礎編から絵本について学ばれてきた方に絵本とは違う語りの世界を体感していただけたと思う。小道具を使ってすぐに子どもたちと楽しめる小さなお話も紹介させていただいた。今後の活動の参考にしてもらえたらいいと思っている。

委員長：4回を通してボランティアに登録している方、していないけれど市内で読書活動されている方も参加してくれた。皆さん熱心で、良い学びの時間を設け

ることができたと思っている。3月12日は、絵本の読み聞かせから一歩進んだ語りを体感したり、小道具を動かしながら自ら語りを体験したりしてよかった。各回の満足度も高い。次年度も続けていくが、こんな講座が必要だという意見があれば出していただきたい。

A委員：世界情勢が厳しくなっていて、ウクライナとロシアの戦争は日本にも影響があると思う。世界中に目を向けるということ、絵本を通して私たち大人が学んでいく必要があると思っている。SDGsということが言われているが、コロナと戦争でそのゴールが見えにくくなっている。一方で温暖化は確実に早まっている。まず大人が学んでそれを子どもたちに伝えていくという責任があると思うので、そういう観点の講座があると良い。ノウハウはもちろん大事だが、絵本でしか学べない環境や平和の問題というものがあるのではないかと感じている。

F委員：子どもたちはものすごく不安の中で生きている。その不安を払拭させてあげられるような力を本は持っていると思う。講座アンケートを見て心配になったのは、参加者の年代で50代以上が多いということ。私たちが昔講座をやっていたころは30～40代がすごく多かった。子どもたちの問いに直接答えてあげられる子育て世代が参加できるようなことはできないのか。子どもプラザなどで講座をやると、宣伝もそんなにしていないのに子育て世代がすごく集まる。普段来ているところで学べるという体制だから集まりやすいのかもしれない。「支援の必要な子どもたちと読書」とか「乳幼児読み聞かせスキルアップ」などはそういう世代に聞いてもらいたい。土日で開催すると子どもたちがいるから出られなということもあるかもしれないので、参加者の年齢層が10歳は若返るような工夫をみんなで考えたらどうか。A委員の意見に関連して、やはり、本を手渡すということ考えたときにいろいろな技とか方法というのも大切だが、本の中身を知ることがものすごく大事。そこを抜きにはできないので、基本に立ち返ってそういうことを知る講座があってもいいと思う。今年は図書館員と連携してできたというのはいいと思うので、それをもっと広げていただいて関係を強固なものにしてほしい

委員長：補足をすると、スキルアップ講座は毎年4回やっているが、令和元年度は多文化異文化理解、令和2年にはSDGsに関する講座を開いた。今の不安定な世界情勢を受けてまたこのような講座が必要だということは理解しているので、図書館の皆さんは来年度の講座を組み立てるときに検討してほしい。年代の問題も検討していく必要があると思って聞いた。読み聞かせ、語りと

という言葉が前に出ると参加しにくい人もいるのでその辺も考える必要がある。スキルアップ講座に関しては、各回の最後に、講座の対象年齢に応じて、図書館から子ども読書に関する取り組みや事業をPRした。参加者の皆さんに情報が届けられたと思う。

【報告事項2 令和3年度 第2回作業部会の報告】

事務局：説明

委員長：「ティーンズブック」は、昨年度第1弾ができて来年度の第2弾発行に向けて準備をしている。毎年1つずつ増やしていく予定。前回の委員会で、新しい本も紹介した方が良いという意見があったので、それも踏まえて検討してほしい。来年度の委員会で第2弾が配られることを楽しみにしている。

【協議事項1 サードブック事業の進捗状況について】

事務局：説明

委員長：これまでの委員会等でいただいた意見を全て踏まえてこの案の作成にあたってもらった。私も含めて児童室のみなさんと何度も修正を重ねた。この最終案をまとめるにあたり、先般伊佐治教育長の元に出向いて意見を聞いた。大きく変わった点は、1年生に本をプレゼントするという精神を学級文庫方式でも大事にするということ。学級文庫としてプレゼントし、その上で1年次の終わりに1人1冊思い出と共に持ち帰るということを事業の主軸とした。予算としては、35冊×単価ではなく、1人に1冊配布した場合と同額の予算をクラス数で割って73クラスに同じ冊数を届けるということにした。紛失等や転入してくる児童のことも考えて35冊プラス1、2冊程度多くできればと考えている。

C委員：前回の委員会から随分よくまとめていただいた。特に意見はないが、苦勞してまとめていただきありがとうございました。

D委員：教職員の負担軽減という問題がいつも学校現場では議論されているが、教育現場の理解という点はどうなっているか。

事務局：現在のところまだ話をしていないが、先生方の手をなるべく煩わせない方法でやっていきたいと考えている。

D委員：ボランティアの活用も考えて、学校サイドとはうまく調整してほしい。公民館ではコミュニティスクールの関係で各学校に入っていて、ボランティアの

手配もやらせてもらっている。先生方の負担を減らす形で調整してきているので、学校側ともよく相談して進めてほしい。

委員長：おっしゃるとおりで、先生方に負担をかけない形でいかにこの事業を有効にやるかということを考えてきた。資料の「配布方式比較表」を見ると、1人1冊方式の方が学級文庫方式より先生方の負担が多くなることがわかる。いずれにしても学校との連携なくしてはできない。相互理解のもと、子どもたちにとってより良い事業となっていくよう配慮しながら進めていただきたい。貴重な意見ありがとうございます。

B委員：前回の意見をくみ取って、いい形で提案していただきありがたい。学校では掃除の後に読書の時間がある。学級によって読書にすぐ入れるところもあれば何もしないうちに終わってしまうところもある。何が違うかという、読める学級ほど担任の先生が率先して本を読んでいる。それをずっとやっていると子どもたちも自然に本を読むようになってくる。高学年にいくほどそうなる。そう考えると、先生たちの負担を軽減していただくというのは大変ありがたい考えだが、子どもたちが1年間学級文庫で読んだ本を最後どんな思いで1人1冊配布するのかというところまで、先生たちに意識してもらいたい。ただ「市からあげるよ」で終わりではなくて、読書教育はとても大事なことで、大変だと思わずに読書のいいチャンスをもたらすと学校側が思わないことには進まない。そのことを学校、担任が理解したうえで、学級文庫で読まれてぼろぼろになった本でも、最後に子どもが「ぼろぼろだけど私はこの本がほしい」と思えるような1年間にするために市から大きな予算をかけているので受け取っていただきたい、というような発信でぜひ配っていただけるとありがたい。

F委員：ブックコートフィルムはかけるのか。

委員長：その予算はないので、ブックコートフィルムはかけないで配る。

副委員長：資料17～18ページの「期待される効果」は短い文章によく落とし込んであると思う。予算を取りに行くときにはこれを自分の胸に落として、ぜひ自分の言葉でこれを語ってほしい。わからないのが「シンカ」というカタカナの言葉。この言葉は市でキーワードとして使っているのですか？

事務局：「進化」と「深化」です。松本市の総合計画で掲げている言葉です。

副委員長：認知されている言葉ではないので、しっかり説明を書いておいてほしい。
予算は頑張ってとってきてください。

A委員：前回からこのように目覚ましい形で方針をまとめていただきありがたい。一つ心配なのは、始まったらこの形でしばらくは行くと思うが、良かった点や困った点を教育現場の方たちとやり取りして微調整していかないと混乱を招くことになるかと危惧している。私自身は学級文庫方式にさせていただいてうれしいが、どのように子どもたちに届いていくのか心配なところもあるので、あげたからおしまい、ではなくボランティアの方の協力もいただいて本を修理したりしながら息の長いものにしていかなければいけない。現場を注意深く見て、子どもたちによい形で本が届くようにしていかなければいけないと思った。

F委員：とてもわかりやすい形でまとめていただいたと思う。ひとつ心配なのは、図書館の体制が変わること。長年図書館とお付き合いさせていただいているが、最初に計画した人が誰もいなくなってしまう事業の継続性が保てないことが結構あった。ブックスタートも、コロナ禍で本を手渡していく中で当初の目的はどこへ行ってしまったんだろうと思うが話し合う機会がない。図書館の中でみんなの心をあわせてやっていただくのはもちろんだが、正規と長く勤めている嘱託職員¹を組み合わせて次に続いていく方法も検討してほしい。事業がうまくバトンタッチされていくような体制ができると私たちも安心できる。そうすればサードブックもとてもよいものになると思う。このくらいの予算で全国に発信できる「松本モデル」ができる。私たちもバックアップしたいので、「松本すごいよね」と言われるところまでこの事業を押し上げていきたい。

G委員：よくまとめていただいたと思う。学校側の負担軽減ということを考えてくださっているが、本当に子どもたちと本との出会いや教育での活用ということ考えたときに、学校図書館をもっと充実させていくということを視野に入れておかなければいけない。30代、40代で本することに思いを寄せる人が育っていかないということは、これから先50代以上の方がリタイアされた後、それを引き継いでいく人がいないということで、図書館に限らずいろんなジャンルで起こっていることだと思う。現在の育児の現状は昔とは全く異

¹ 現在は「会計年度任用職員」

なっていると思うので、その方たちを視野に含めて考えていかないと今だけ良くても意味がない。学校図書館は、司書が市の職員になったが大きくは変わっていない。30年間同じ議論をしている。松本の現状は、全国と比べてすごく悪くはない。まあまあ充実しているので、そこで定着してしまっている。図書館は社会教育的な考え方や発想と学校教育的な部分をつないで両方の機能を高めてくれる。学校司書の仕事の軽減を考えるのは大事だが、それを考えなくてもいいような学校図書館を作っていくことも大事だと思う。1日5時間勤務というのではなく、子どもたちが学校活動をしている間は図書館が空いていてもっと関わっていけるような手立てを考えなければいけない。今まで40年間やってきてできなかったのであればそのやり方ではだめだったということ。まずは知ることから始めて新しいアプローチを考えいい方向に変えていきたい。長野県ではセカンドブック事業をこんなにたくさんの自治体で行っているということを知って驚いた。全国ではむしろブックスタートもやめる自治体が増えている中でこれだけ維持しているというのは、本当に高い文化意識を持っていると思う。次の世代につなげていけるように、職員体制や世代などについてもアンテナを張って、長いスパンで未来を見ていく必要があると思う。

委員長：大変いい視点だと思う。読書活動を推進していくうえで学校との連携はより強くしていくべきだし、B委員やG委員が言ったように、本当に子どもたちにとって良いことは何かを、もちろんあまり負担にならない形で考えていく。

E委員：サードブック事業案をみて、学級文庫が入ったら子どもたちがどんな顔をするかな、とわくわくした。学校の先生たちも大変だと思うけど子どもファーストで考えて行ってほしい。私たちも後押しできるようにしていきたい。本当に早くこれが実現できればいい。この本が教室のどこに置かれるのかということも大事。小さな図書館が教室の中にできれば素敵だと思う。

【協議事項2 各事業の実施年度】

事務局：説明

副委員長：読み聞かせボランティアや読書推進サポーターは、上限なく増やしていくのか。人数の目安はあるのか。

事務局：現在のところ上限は設けていない。

委員長：第3次計画策定の際にこれまでの検証をしていく。ボランティア養成、サポ

ーターの運用、読書案内人の活用などについて考えていく必要がある。まずはボランティア登録者の更新をきちんとするというのを新年度皆さまに諮りながらやっていく。

【その他 サードブック事業に関する要望書の提出について】

委員長：サードブックについては概ね皆さんから背中を押していただいたが、予算が通らないと進まない。第2次計画には令和5年度から始めると書かれているが、実際にはそういうことになる。私たちにできることは何かと考えたとき、サードブックについて検討がなされていることは、多くの市民、議員も含めてまだ知られていないのが現状なので、委員会の総意として学級文庫方式でのサードブックをぜひ行いたいということを市側に要望したいと考えている。今日の意見を反映しての要望になるが、私に一任していただきたいと思う。ご賛同いただける方は挙手をお願いします。

(全員挙手)

委員長：ありがとうございます。では、皆さんの総意ということで要望する。今後も学級文庫方式のサードブックが実現するよう応援いただきたい。

2 「5 委員からの意見」について

委員長：今年度最後の委員会なので、一言ずつ頂戴したい。

B委員：この委員会で本や読書について考える機会をいただいた。子どもたちは動画などには注目するが黙って本を読むということがなかなかできない。大人になったときに本によって豊かな気持ちを広げていけるように、図書館の力を借りてずっと続けていただければありがたい。

D委員：1年の任期でやっているなので継続性がなく皆さんと同じレベルで話が共有できないのが問題。生涯学習課と調整したい。ボランティアさんから「読み聞かせ」という表現が適切なのかという意見をよく聞く。偉そうな感じがするので、もっといい表現があればやりやすいと思うのでその辺も考えていただきたい。

E委員：毎日児童センターにいるが、コロナ禍で遊びが限られている。そんな中、本はすごく充実している。団体図書も倍くらい借りることができて、子どもた

ちは自然に本を手にとっている。低学年の子は自分が手に取ったものだけでなく隣の子の本をのぞきこんで会話している。DVDを流したりすると本当に集中して見るが、本を読みながら友達同士でコミュニケーションをとるといったのもいい場だと思う。どんな小さな子にも本は絶対に必要だと思うので、ぜひ今後につなげていきたい。せっかくスキルアップ講座を受けたボランティアの方もたくさんいるので、センターに招くなども考えていきたい。

G委員：それぞれの現場で学びを深めて熱心に仕事に取り組んでいる方がいるので、それをどうやったらもっと活かすことができるかと考えている。中の方たちがどれだけ頑張っているかということはよくわかっているので、外から応援の声をあげたり手を携えたりしていい活動になっていけばいいと思う。

F委員：何回か参加しているが、少しずつ進化していっていると思う。どんな事業でもまっすぐ進むということはないが、40年間見ていて確実に進化はしていると思う。それが戻らないようになんとかしたい。回りの人たちも応援したいという気持ちがあふれているので、投げかけてほしい。手を携えて良い方に進んでいけたらと思う。

A委員：コロナ禍で楽しみが減っているなか、図書館に通ってくる親子は増えているのではないか。本は家庭では親子のコミュニケーションのツールになるし、子どもの心の成長の一助になる。子どもたちに本の楽しみを届けるというのがここにいる私たちの役割だとしたら、自分のできることはお手伝いしていきたい。サードブックがもし軌道に乗ったら子どもたちにとってたくさんの本との出会いになるので素晴らしいことだと思う。私たちボランティアも手伝いたいので、ぜひ声をかけてほしい。

副委員長：以前とは読書環境が全然違ってしまっている。お母さんたちも読んでやりたいと思っても仕事をしていると時間との戦いだったり、コロナで接触できなかったりということもある。この時代に新しいことを考えていかないといけない。今、キャッチコピーの時代でみんなそれに食いつくが、読書は文脈が読み取れないと理解できない。それができなくなってしまうことが怖い。ネットは短い言葉でできているし、それでわかったような気になってしまうが後に残らない。それはとても危険なことだからもっと読書しましょうということを深刻に言わなければいけないが、「読書」ということを全面に出さずに進めていくような新しい発想が必要。図書館だと敷居が高いかもしれないのでこどもプラザのようなところでもよい。推進委員ももっと啓発してい

けるようにならないといけない。

委員長：重要な指摘だと思う。第3次計画に向けて時代に則した視点を持っていかないといけないと思った。本から遠いところにいる人にこそ発信していきたい。今後ともぜひお力を貸してほしい。

閉会

以上